様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月２５日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2010 ～ 2012
課題番号：22320097
研究課題名（和文）　日本国外の日本語バイリンガル若年層の複数言語能力意識の把握と日本語教育方法の開発
研究課題名（英文）　Study on consciousness of plurilingal competence of Japanese adolescents growing up overseas and development of their language pedagogy.
研究代表者
川上　郁雄　（KAWAKAMI　IKUO）
早稲田大学・日本語教育研究科・教授
研究者番号：30250864

研究成果の概要（和文）：本研究は欧州、米国、豪州などの 11 カ国に居住している日本語バイリンガルの子どもたちの複数言語能力意識について調査をすると同時に、子どもの家族、子どもに関わる教員等から子どもたちの言語使用､言語学習について面接調査を行った｡その結果、複数言語能力意識が子どもたちの言語学習とアイデンティティ形成に大きな影響を与えていることが明らかになった。また、その成果を論文、書籍にまとめ公表した。

研究成果の概要（英文）：Researches on consciousness of plurilingal competence of Japanese adolescents growing up overseas were conducted in eleven countries in Europe, the United States of America and Australia. Through interviews to parents and their children as well as teachers, influential factors on plurilingual language use and language learning were analyzed. As a result, their consciousness of plurilingal competence of Japanese and other languages was to be found important factor on their identity development and language pedagogy based on this factor was suggested.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
22 年度	2,300,000	690,000	2,990,000
23 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
24 年度	1,900,000	570,000	2,470,000
年度			
年度			
総　計	6,100,000	1,830,000	7,930,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語教育
キーワード：年少者日本語教育、移動する子ども、言語習得、アイデンティティ、言語能力意識、複言語複文化主義、バイリンガル教育

１．研究開始当初の背景

（１）近年日本国外で成長する日本人の子どもや国際結婚家庭の子どもが増加しており、その子どもたちへの言語教育、特に日本語教育が喫緊の課題となっている。

（２）日本国外の日本語補習授業校、日本語教室等では、日本の文部科学省検定の教科書（特に国語の教科書）が子どもの日本語能力の実態にあわず、子どもたちは学習困難に直面している一方、教師も指導上の困難を感じており、日本語を教える方法が検討課題となっている。

２．研究の目的

（１）本研究は、日本国外で幼少期より複数言語環境で成長した子どものうち、日本語バイリンガルの子どもたちの複数言語能力お

よび複数言語能力意識を把握することを第一の目的とした。

（2）そのような日本国外で成長する子どもたちの実情を把握すると同時に、それらの子どもたちに対する日本語教育の方法を検討することを第二の目的とした。

３．研究の方法

（1）日本国外で日本語を学ぶ子どもたちの学校や教室を訪問し、子どもたちの教育現場の実態を調査した。

（2）同時に、それらの学校等で学ぶ子どもたちおよび家族、教員への面接調査を行った。

（3）さらに、日本語教育の方法についてそれぞれの国、地域の日本人、日系人を含む関係者から聞き取り調査を行い、この課題について協議を行った。

４．研究成果

（1）日本国外で日本語を学ぶ子どもたちの現状

子どもたちが置かれている状況は、家庭で日本語、学校で地域語という 2 言語環境だけではなく、国際結婚している家族の子どもの場合は、父母で使用言語が違い、かつ学校での学習言語がそれ以外の言語という 3 言語以上の環境で成長するケースもあるなど、家庭や地域によっては多様な複数言語環境に子どもたちが置かれている。このような状態は日本国内でも見られる状況であるが、注目されるのは、複数言語環境で成長する子どもたちが複数言語環境で生活し、日本語を学習することを肯定的にとらえているケースがある反面、複数言語使用を負担に感じ、日本語学習も進まないケースもあることであった。後者の場合は、日本語を使用した教科学習や自己実現も進まず、どの言語による学力もついていないケース、そして、そのことを自覚し、不安を感じる子どももいることが調査の結果、明らかになった。

（2）日本語学習環境

日本国外の日本人学校や日本語補習授業校（補習校）などでは、日本に帰国する子どもを対象に、日本の学校カリキュラムと同じ教育をこれまで実施してきた。しかし、21 世紀に入り、日本に帰国する予定のない、現地定住の子どもたちが増えてきた。そのため、補習校、日本語教室等では、文部科学省検定の日本の教科書を理解するだけの日本語力が育っていない子どもたちが増加し、それらの子どもたちへ教員たちがどのように日本語を指導するか、教科内容を教えるかに苦慮する現状が世界各地にあることが、今回の調査で明らかになった。つまり、これらの日本国外で日本語を学ぶ子どもたちの日本語学習がグローバル・イシューであることが改めて判明した。

（3）親の考え方

したがって、そのような現状であるからこそ、日本に帰国予定のない、現地定住の子どもたちに親たちがどのような思いで日本語を教えようとしているかを知ることは、今回の調査でもっとも重要なテーマであった。

これらの子どもの日本語学習を含む複数言語学習、そして複数言語環境での子育てという意味では、親の教育観、日本語教育観、人生観なども子どもに影響していると考えられる。特に注目されるのは、日本国外で日本語学校や日本語教室を運営する日本人の父母たちの考え方である。これらの親は、日本語を子どもたちに日本語を教えることを「親の言語を子どもに継承」することをめざしている。

その親たちに「なぜ、日本語を教えたいと思うのか」という質問に対して、「日本に一時帰国したときに祖父母と日本語で会話ができるために」というほかに、「子どもと日本語を話したい」「子どもを叱るとき、日本

語で叱りたい」「自分の好きな日本文学について、日本語で議論したい」という答えが返ってきた。そのため、「日本語を話せることは、よいことだ」「日本語を学ぶと将来の可能性が広がる」という考えがあり、その裏には、「日本語を話せなくなることはマイナス、あるいは失敗」という考え方があるように見えた。これらの親に対するインタビュー調査から見えることは、親の考え方の前提に、「日本人の親が子どもに日本語を教えることは当然」いうビリーフがあり、そのことに基づいて行われる日本語教育を「継承語教育」あるいは「継承日本語教育」とする見方があると考えられる。したがって、ここに、日本国外の複数言語環境で成長する子どもたちに日本語を教えるのは当然であるという言説が生まれてくる。さらに重要なのは、親や指導者が考える、日本国外で育成される日本語能力は、常に日本で成長する同年代の日本人の子どもたちの日本語能力を参照点に考えられるということである。特に日本の学校制度の中にいる児童生徒の国語能力に照らして、日本国外にいる子どもたちの日本語能力を評価する見方や言説が再生産されている。この点も、今回の調査で判明した点である。

（4）何のための「継承語教育」なのか

これらの結果から考えると、日本にいる同年代、あるいは同学年の日本人の子どもたちの「国語能力」を判定基準にした日本語能力観によって、これらの子どもたちを対象にした「継承語教育」を実施することに疑義が生まれてくる。つまり、日本国外にいる日本語を学ぶ子どもたちを対象にした日本語教育において、どのような日本語能力を育成することをめざすのか、そもそも、何をめざして、日本国外にいる子どもたちに日本語を教えるのかという問いが生まれてくる。

これまで日本国外にいる日本人あるいは日系人の親の中では、自分たちの子どもに日本語を教えるのは当然で、バイリンガルになることはよいことだというビリーフがあり、日本語学習を継続することや日本にいる同年代の子どもと同じような日本語能力を獲得するという、いわゆる「均衡バイリンガル」になることが成功例として語られてきたことが関係者へのインタビューから窺えた。しかし、そのような日本語の継承語教育を支えるビリーフやマスターナラティブの結果、日本語学習を継続できない子どもたちや「均衡バイリンガル」になれなかった子どもは、失敗例としてみなされる傾向があり、そのような負い目を背負って日本語学習を中断したり、大人になっても日本語が不十分という自己認識や不安感に悩まされるケースもあることを関係者から聞いた。

実際、幼少期より日本語を継続的に学習する子どもの数より、途中で日本語学習を放棄したり、その結果、日本語を使用しない人になる数の方が多いのではないかと推測される。子どもたちのそのような現状を考えると、これまで日本語の継承語教育を支えるビリーフやマスターナラティブを捉え直すことも必要になるだろう。そのときに焦点化されるのは、
何のための「継承語教育」なのかということである。

（5）日本語教育から複数言語教育へ

日本国外にいる日本語を学ぶ子どもたちを対象にした日本語教育は、親の言語を自動的に、あるいは必然的に子どもに学習させるという「継承語教育」から脱却することが必要である。なぜなら、複数言語環境で成長する子どもにとって、日本語は子どもが接触する言語群のうちのひとつにすぎない。その一

つの日本語だけを見て、子どもの言語的な成長を、そして人間育成を考えることは偏った見方から子どもを捉えることになるだろう。むしろ、子どもが接触し、学習している複数言語の世界をまるごととらえ、その世界に複数言語のひとつの言語である日本語をどのように位置づけ、その複数言語に子どもがどのように向き合い、生きていくのかという言語教育実践に変換すべきなのではないか。そのための着眼点は、「日本語教育から複数言語教育へ」である。このような意味の複言語主義の教育を創発することが今後の課題であろう。

（６）「グローバルバンドスケールの構想」と「ユニット教材の開発」

本研究では、そのための方法論として、「グローバルバンドスケールの構想」と「ユニット教材の開発」をテーマに研究を進めた。

「グローバルバンドスケールの構想」は、川上が開発した「ＪＳＬバンドスケール」をモデルにした日本語能力を把握するものさしである。「ＪＳＬバンドスケール」が日本語環境における第二言語習得過程の把握をねらいとしているのに対して、「グローバルバンドスケールの構想」は、非日本語環境である日本国外の環境における子どもたちの日本語能力を把握するための枠組みである。小学校低学年、小学校中高学年、ハイスクールの３つの年齢集団に分けて構想し、その枠組みを作成すると同時に、その詳細の例を収集した。

さらに、グローバルバンドスケールによって把握された日本語能力に応じた言語活動の実践案を開発した。それは、複数回の授業時間をユニットとしてまとめ、その中で、活動をベースにした授業を展開するような実践案である。ユニットを複数組み合わせてモジュール形式で発展させることもできる。子どもたちはグループやクラスでそれらの活動を行い、活動の中で日本語を使用する。例としては、「森林破壊」「地震が起きたら」「スーパーサイズ・ミーから考えるファーストフード文化」「色のイメージ：ディズニー映画から」「自分にとって大切なものは何か」など、例を提示し考えることから、子どもたち同士で話し合う、調べて発表するなど、多様な実践例を開発した。今後は、これらを実際に使用した実践を行い、検証することが課題である。

（７）以上の研究成果をどう捉え、どう公表したか。

本研究から、幼少期より複数言語に接触しつつ、成長した経験は若年層の若者たちの言語能力意識に影響を与えるだけではなく、彼らのアイデンティティ形成にも強く影響していることが確認された。

その研究成果は、2012 年 3 月 3 日、4 日に早稲田大学で開催された国際研究集会「移動する子どもたち」のことばとアイデンティティ―時間と空間、そして自己形成―」においても発表され、本研究テーマを深めるとともに、国内外の実践者との研究交流を行った。現在、その成果の一部は、ジャーナル「移動する子どもたち」3 号に研究論文として掲載し、公開を行うとともに、これまでの研究成果をまとめ、2013 年に書籍にまとめ刊行した。川上郁雄編『「移動する子ども」という記憶と力―ことばとアイデンティティ』（くろしお出版）。

本研究テーマは、国内外で「移動する子ども」が自らの複数言語能力にどのように向き合い、主体的な生き方とアイデンティティをどのように構築していくかということに、ことばの教育が果たす役割とあり方を考えることにある。その意味で、本研究の成果は、「移動する子ども」に関わる親や関係者、そして成長する子どもたち自身にとっても大きな知見を与える貢献ができると期待される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）

①川上郁雄、「移動する子どもたち」から見た日本語の力とは何か、早稲田日本語教育学、査読有、８、2012、129‐136、
②川上郁雄、尾関史、太田裕子、「移動する子どもたち」は大学で日本語をどのように学んでいるのか―複数言語環境で成長した留学生・大学生の日本語ライフストーリーをもとに、早稲田教育評論、査読有、25－1、2012

〔学会発表〕（計１件）
①川上郁雄（代表）、尾関史、太田裕子　複数言語環境で成長した留学生・大学生はどのように日本語を学習しているのか-「移動する子ども」の視点から大学生の日本語教育を問い直す、2010 世界日本語教育大会（台湾・国立政治大学）.

〔図書〕（計３件）
①川上郁雄、くろしお出版、「移動する子どもたち」のことばの教育学、2011、241.
②川上郁雄、オセアニア出版、移民の子どもたちへの言語教育―オーストラリアの英語学校で学ぶ子どもたち、2012、235.
③川上郁雄、くろしお出版、「移動する子ども」という記憶と力―ことばとアイデンティティ、2013、374

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
川上郁雄研究室ＨＰ
http://www.gsjal.jp/kawakami/

６．研究組織
(1)研究代表者
川上　郁雄（KAWAKAMI IKUO）
早稲田大学・大学院日本語教育研究科・教授
研究者番号：30250864
(2)研究分担者
尾関　史（OZEKI FUMI）
早稲田大学・日本語教育研究センター・准教授
研究者番号：00505399
(3)連携研究者
太田　裕子（OOTA YUKO）
早稲田大学・オープン教育センター・助教
研究者番号：50434353